



1. 礎石建物 301 (トレンチ 195、北から)

第9・10次調査

第9・10次調査は、第8次調査で検出した石列や石敷等の遺構の規模や構造、性格の解明を目的として実施した。

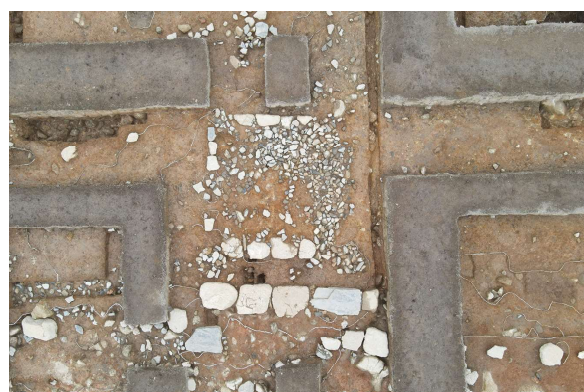
その結果、トレンチ 172・173 で検出した遺構が1辺約 5.5m の礎石建物であること(トレンチ 195)、トレンチ 178・182 で検出した遺構が建物や塀等の一部であり、遺構の一部が柱間が4～5間以上の東西方向に延びる礎石列であることが明らかとなった(建物等関連遺構、トレンチ 197)。

特に前者においては、凌雲寺跡で初めて全体像が明らかとなった建物遺構であり、建物の規模や構造、位置から、開基堂や開山堂等であった可能性が考えられる。

さらに、トレンチ 197 では、凌雲寺期の造成土下から、下層遺構である石敷 304 を検出した。

このことから、凌雲寺期にも複数の段階が存在する可能性が考えられ、創建から廃絶までの間に寺院施設の改修を行ったことが想定される。

→第9・10次調査：第Ⅱ部Ⅱ章



2. 建物等関連遺構 (トレンチ 197、上が北)



3. 石敷 304 (トレンチ 197 Ⅷ区、南東から)



1. 第8～11次調査出土瓦・塼

瓦・塼からみた凌雲寺跡

第8～11次調査では、多量の瓦や塼が出土した。

既往の調査結果と合わせて、これらの分布を整理すると、トレンチ 31（石垣 201）～トレンチ 197 にかけて集中しており、塼についてはさらに南側に偏在していることが明らかとなった。このことから、瓦や塼を用いた建物や塀等がこの一帯に存在していたものと推定される。

また、瓦の組み合わせからは、本瓦（平瓦・丸瓦）が多数を占めることから屋根構造は、基本的には本瓦葺であると考えられる。

さらに、今回の調査では新出型式の軒瓦が確認された。なかには館跡や築山跡、乗福寺跡出土のものと同範とみられる軒瓦や、滴水瓦の影響を受けた可能性のある軒平瓦もみられ、大内氏との関連や凌雲寺の性格を考えるうえで重要な発見となった。

→瓦・塼の分布 : 第IV部 I・II 章

→瓦の分類 : 第IV部 II 章



2. 館跡や築山跡、乗福寺跡出土瓦と同範とみられる軒丸瓦



3. 瓦出土状況（トレンチ 197、北北東から）